

## 竹と柳 — 終戦前後の思い出

吉田 廣

(2003年8月14日記)

### (その1) 強烈なお別れビンタを食らう

昭和20(1945)年4月、私は、国民学校(昭和16年度から満6年間、小学校はこう呼ばれていた)の5年生になった。当時、一家は、両親、私と弟3人で、札幌駅の改札口から歩いて5分もしないような所に当時あった一戸建てを借りて、住み始めてから6年ほど経っていた。外に私より9歳上の兄(間は生れていない)は、宇都宮で見習士官として勤務中のため、家にはいなかった。父はここで、今でも時には看板を見かける、カイロプラクティック治療院を開業していた。但し、当時、カタカナ語の使用は自粛されていたので、看板には、「××堂療院」と表示されていた。

その頃、北海道方面は、一応平穏であったが、その年の3月10日には東京大空襲、4月1日には、沖縄への米軍上陸開始があり、一般向けにもそれらの概略位は報道されていた筈である。札幌も本格的な空襲となったら、駅付近などは真先に危険であると父は判断したのであろう。4月末(一旦28日と決めたが、雨天のため、翌29日となった)、一家は、汽車で1時間ほど東方の、農村地帯にある小さな町に引越したというよりは、自発的に疎開した。

転校先では、元の学校と同じにということで、男女混合の学級に編入された。担任の男性教師は、当時、どの学校にも一人や二人はいた、いわゆる「軍国教師」という類の人物であった。背丈は人並み程度であったが、後述するように、戦後は、肉体労働で暮したとのことで、筋骨はたくましかった。朝、登校すると、先に教室で待構えていて、「お早ようございます」ではなく、「(戦争に)勝ちます」と挨拶させられた。そうして待構えていながら、着ている服のボタン付けをしていたことがあったから、独身であったのだろう。

授業中にも、しばしば、戦意高揚の説教らしきものに熱中して、新学年から1ヶ月少々しか経っていないのに、算数の授業などは、もとの学校より1頁以上も遅れていた。ただ、その内容とは、決して、都会の連中は「女中」(と言う言葉は、今では使わない事になっているらしいが)などを雇って、楽をし堕落していると言った趣旨の繰返しであったと記憶している。但し、皆の態度は、いつもの話かといった雰囲気、札幌から転校して来た私にあてつけたわけでない事は確かであった。

体操の授業は、通常、男女別々だったと思う。農村地帯だけあって、校庭は、ぎりぎりながら、野球場一面として使える広さで、一隅には、粗末ながら、バックネットが建っており、他の一隅には、やや煤けてはいたが、本格的な四本柱と屋根を備えた土俵が築かれていた。

その土俵の上で、軍隊の内務班(という所では、特に新兵はどう扱われるかということ、後年、いろいろな物で読んだ)もどきにシゴかれて、非力な私は、大いに閉口し、緊張させられた。彼の、筋肉の分厚い胸に無理やり体当たりさせられたときの緊張感・屈辱感と感触は、今でも思い出される。

そのような緊張と戸惑いの日々が一月もたつたため内に、彼は召集されることになった。その話があった直後の体操の授業時だったか、彼は、男子を校庭の一隅に並ばせ、これがお別れの印だとか言って、一人ずつに強烈なビンタをくらわせ、その都度「有難うございます」と答えさせた。彼の分厚い肉塊のような掌が頬に食込んだ瞬間に、彼に対する緊張感は絶頂に達した。この間、女子はその後ろに、少し離れて控えさせられていたと思う。

朝礼で別れの挨拶があったとき、皆で「若鷲の歌」を歌った。これは、当時、霞ヶ浦を基地として訓練を行っていた、海軍飛行予科練習生(という名称だったと思う)を歌ったものなので、入隊先は、海軍航空隊だったのかと思っていたが、彼との間に、何かをたずねられるような気持には全くなれなかったので、その事は全く判らずじまいになった。もともと、以前から、耳を少々悪くしていた私が聞き落したのかも知れない。彼の質問に答える以外、彼と口をきいた事は全くと言っていいほど皆無で、彼自身については、現在に至るまで、氏名と、終戦後の断片的な消息以外は、何も知らない。

やがて、8月15日、(昭和)天皇陛下が、録音とはいえ、ラジオで一般国民に自らのお声を聞かせる、史上初めての「玉音放送」で、日本が降伏する事になった旨が公表され、9月2日の降伏文書調印があつてから間もない初秋の頃、朝礼の壇上に、復員した彼がひょっこり現れた。そこで彼は思いもよらぬ素振りをみせた。即ち、おおげさに首を前後に動かしながら、全児童の一人一人に、睨めっこでも挑むかのような表情で、しばらくの間、場内を隅から隅まで見回して、皆が笑い出しそうなのをこらえさせたあげく、おおげさな擬声語を連ねて、テニヲハも整えずに早口でまくし立てた。要するに、隊内では、碌な装備もなく、来る日も来る日もやられたのは、敵の上陸に備える陣地の土堀りだけであつたというのが、彼の言いたい事であつたらしい。以後、彼の姿を見ることはなかつた。私は、彼の打って変った態度に唾然とするだけであつた。

この情景は、先ほど述べた、恐らくは他の級友にとつても、あまり愉快とは言えない緊張感・屈辱感の体験を、60年近く経った今でも、私には忘れられないものにした。

数年後、クラス会の席上で聞いた、当時の教師たちの消息によれば、彼はその後、土工などになつたりして、教職には戻らなかつたという。終戦直後、しばらくの間は、海外からの引揚者や復員兵があふれて、大変な就職難の時期であつたからだろうとは思つたが、それ以上の事は考えもせずにいた。後年、札幌の同じ小学校を卒業していた家内に、この時の思い出を話したら、当時、終戦を境に、あらゆる価値観が一斉に逆転したのに失望して、教職から身を引いた例がかなりあつたとの事であつた。

彼も、使える装備の碌にない軍隊の実情を見ただけで大変なショックを受けたのだらうと思われる。しかし、つい4・5箇月前までは、満10歳前後の児童を、鬼軍曹式にビンタでシゴいていた人物の俄かピエロぶりは、大人の目から見れば、滑稽というよりはむしろ、みじめな姿であつたかも知れない。その精神的ショックを抑えて、沈着冷静に、残念ながら実情はこうこうであつたと手短かにでも語ってくれたら、聞いた方も、それなりの感銘を受けたのではないかと思わないでもない。

## (その2)柳の木刀

大東亜戦争(戦後、太平洋戦争と言い換えさせられた)中のナンセンスな話として、1万メートルの高空を飛来する大型爆撃機 B29 に対抗しようと、一部で竹槍の訓練が行われたというのがある。永井荷風は、日記「断腸亭日乗」昭和 18 年 2 月 19 日条の本文の後へ、「噂のききがき」と見出しをつけて、次のように付記している。

「... 米兵落下傘にて地上に降立つ時、竹槍にて米兵の眉間を突く計略なりといふ(中略)良家の妻女に槍でつく稽古をさせるとは滑稽至極。何やら猥褻なる小咄をきくやうなり。」

さて、(その1)で述べた通り、私の一家は、終戦直前の春、札幌駅近くの家を引払って、車で 1 時間ほど東方の、農村地帯にある小さな町に移っていた。

その年の初夏の頃、正式な名称は失念したが、各学級、各町内を単位として義勇隊のようなものが編成されることになり、上級生は、体操の時間などに、そのための訓練を始めることになった。

ところで、北海道では、棹になるような竹は自生しないので、今はどうか知らないが、七夕飾りには、柳の枝が使われていた。30 分もあれば、端から端まで歩けるような小さな市街の西側には、石狩川の支流、夕張川が流れていた。新暦の七夕にも間がある初夏のある日、私を含めた上級生男子は、その河原へ赴いて、柳の枝を手頃の長さに切り採って皮を剥き、めいめいの木刀とした。また、手榴弾投げの訓練に使う、陸上競技のリレー用バトン位の棒も切出した。

木刀を使つての訓練は、校庭で、単独または複数の学級の男子が、一斉に揃ってやる素振りであった。振り下す時、同時に膝を少し曲げるという、当時、陸軍で行われていたとかいう手法で、こうすると、切りつけた時の効果が増すという説明があった。ちょっとばかり面白いポーズに見えたかも知れない。もっぱら素振りだけで、藁人形とか巻藁などを用意して打つということは全くなかった。

その年の夏休みは大幅に短縮されて、8 月 15 日を含めた 1 週間位だったと記憶する。とにかく、その日が登校日でなかったことは確かであった。午前中、大人たちが、今日のお昼に、(昭和)天皇陛下が、御自分でラジオ放送をなさるそうだと話合っていた。天皇陛下のお声(玉音)が、録音であったにせよ、国民一般の耳に入る―これが文字通り史上空前の、いかに破天荒な事であったかは、当時の事を記憶されている読者には、よくお判りであろう。当然「超」重大な発表があるものと予測され、聞いた途端に体内を電流が走る思いをした人もあったと思う。

ところが、我家のラジオは、放送開始時間の直前に、どこかが接触不良を起して聴き取れなくなつてしまった。一家は急いで、隣家の開放された窓の前に駆け付け、その家人一同が、ラジオが載つた棚の前で起立して聴いているのを、窓越しに聴かせて貰ったが、時既におそく、陛下の最後の一声を辛うじて聴き取っただけに終わった。とにかく、その内容は、戦争の終結、正確に言えば、日本は降伏する事になった旨を公表する内容であった事は、大人たちの話から理解できた。私は、それまで何となく心の隅にわだかまっていた緊張感が、突然消失したような気分―一時途惑つたものである。

その夏休みも終つた 9 月 2 日には、降伏文書調印があつて、戦争も正式に停戦となり、当然ながら、義勇隊のようなものも消滅し、柳の木刀や手榴弾は、いつ、どのように処分されたか、跡形もなく消えていた。

終戦までは、小学校または国民学校には、5年生から(だったと思う)、体操のほかに、武道の授業があって、男子は木刀、女子は木製の薙刀を使う時間があつたので、運動場の器具置場には、そのための木刀や薙刀が1学級分の数ほどは備えてあつた。札幌の方で私がいた学校を卒業した家内は、終戦直後、奉安殿(この名称を知っている人は、昭和10年前後かそれ以前生れの年代であろう)の裏手に六畳くらいの穴を掘って、その中でこれらを焼却するのを目撃したと言う。見守る教師の中には涙ぐむ人もあつたそうだ。

私が転校した先の学校は、郡部にあつたので、高等科も併設されていて、運動具の種類や数量も多く、柔道用の畳という物があるのを初めて見た覚えがある。本来の木刀や、薙刀、特に前者は、備付分では数が足りないから、柳の枝を切り取って間に合せたのだろうが、それらがどこにあつたか、いつ、どう処分されたかは、知らずじまいになった。

今年(平成15/2003年)夏は、あの夏から58年になる。今までに何度か、当時の同期生の会合案内があつた。この春の案内文に、同期会としては、今回を最後のものとし、有志が別に行う分は、この限りでない旨の注記があつた。しかし、今までもそうであつたが、同期会に参加するだけのために札幌方面へ帰省するのは困難なので、今回も失礼した。当時、同校に勤務していた教師の誰かが招待されていれば、席上で、当時の事情も聞き出せたかも知れない。しかし、その方々は、当然ながら、現在は皆高齢であり、私の知る限りでも、何人かは既に逝去された。残念といえば残念である。

### (その3)私の「戦争体験」とは

あの年の春頃までは、一応平穏であつた札幌近辺にも、一家が転居して間もない初夏の頃から、時々敵機が飛来するようになり、その都度空襲警報の発令があつた。しかし、いつも単機で、専ら偵察目的であつたらしいとのことで、札幌やその周辺は、殆ど無傷のまま終戦を迎えた。敵機の姿も全く見えず終いであつた。私にとって、終戦の日とは、「玉音放送」を聴き損なつたという、書き損じて、空白のまま残つた日記の1頁のようなものである。

あの戦争では、多くの人々が命を落とし、或は様々な苦難を受けた。そういう人達に対して、こう言うのは失礼かも知れないが、私自身は、本格的な空襲を受けた体験もなかつたので、これが戦争だとか、降伏だとかいった実感を、あの頃は持てなかつた。「強烈なお別れビンタ」と、竹槍代りの「柳の木刀」が、私の「戦争体験」であつたと言うのは、ちょっとおこがましいかも知れない。(完)

(筆者注) (その2)の冒頭で引用した「断腸亭日乗」は、磯田光一 編、摘録断腸亭日乗(下)、(岩波文庫1987年)に依る。(以上)